マデルノのファサードにおける壁の扱いについて
TREATMENT OF WALL ON MADERNO'S FAÇADE小林 衛*
Mamoru KOBAYASHI

This paper deals with Carlo Maderno's construction-principle of church façade in the first period of 17th century. This paper, especially, takes up S. Susanna in Rome, which regarded as a milestone of Baroque, and pays attention to typical churches of Counter-Reformation, for example Il Gesù in Rome, and S. Fedele in Milan.

The purpose of this paper is to show Maderno's treatment of wall according to analysis of architectural order on the façades, clarifying division of the wall from frame of the order. In a word, Maderno's method acquires plasticity of wall, independent of the order.

Keywords : Carlo Maderno, façade, wall, S. Susanna, Counter-Reformation, plasticity

カルロ・マデルノ, ファサード, 壁, サンタ・スザンナ教会堂, 反宗教改革, 可塑性

1. はじめに

本稿では17世紀初頭に活躍したカルロ・マデルノ Carlo Maderno (1555/6-1629) の設計によるファサードの構成原理について、ローマのサンタ・スザンナ教会堂 S. Susanna, Roma を中心に考察する。考察にあたっては、この教会堂の計画に影響を与えたとみられるローマのジェズ教会堂 Il Gesù, Roma およびミラノのサン・フェデーレ教会堂 S. Fedele, Milano といった反宗教改革運動の代表的な教会堂と比較しつつ、マデルノの新たな試みを検証する。

1563年に終結するトレント宗教会議以後に活発となった反宗教改革運動は、バロック期における教会建築の改革に影響を与えた。運動の主要勢力であったイエズス会は、海外にも及ぶ広い範囲で活動し、各地に数多くの教会堂を建設している¹。また、ミラノにおいて運動を推進したカルロ・ボッロメオ Carlo Borromeo (1538-84) は、建築を含む芸術活動をも宗教改革の手段として取り込む方策を打ち出した。建築においては簡素な意匠を推奨し、建築家ペッレグリーノ・ティバルディ Pellegrino Tibaldi (1527-96) を擁して、ミラノのサン・フェデーレ教会堂を始めとする教会建築に影響を与えている。

マデルノは、シクトゥス五世 Sixtus V (在位 1585-90) のローマ改造で活躍した伯父ドメニコ・フォンターナ Domenico Fontana (1543-1607) の下で頭角を現し、多くの宗教建築に携わっている。初

期のサンタ・スザンナ教会堂ファサード (図1,2) は、マデルノの生涯を通じた代表作となった。このファサードは現在のところ、バロックの端緒を示すメルクマールと目されている。

これまでのサンタ・スザンナ研究では、マデルノの設計はジェズ教会堂に関わる二つの計画案²と共通点が多いことから、それらの設計の折衷案とみる傾向にある³。それらの研究では、ファサードの凹凸と装飾の与える効果の分析を主体として進められてきたが、壁の建築的処理については問題とされなかった。壁は装飾の地とみなされ、従属的要素と受け取られているようである。オーダーについても、各要素の個別の考察が中心であり、複数の要素を組み合わせたモチーフについて考慮されることがなかった。

本稿では、ジェズ教会堂の二案とサンタ・スザンナのファサードについて、オーダーの処理法の再検討から、モチーフとみなされるものの抽出を試みながら、ファサードにおける壁体の建築的取り扱いについて考察する。

2. 反宗教改革運動と教会堂

16世紀に興ったイエズス会は、反宗教改革運動を推進する主要勢力となり、都市に活動拠点を求めた⁴。バロック期の修道院の多くは中世のような人里離れた土地ではなく、成熟した都市の中に、教会

* 九州大学大学院人間環境学専攻空間システム専攻
大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Human Environment Studies,
Kyushu Univ., M. Eng.

堂を含む教団の複合施設として新たに建設された。イエズス会教会堂の六つの計画案を記した図面(図3)を見ると、三廊や一廊式のラテン十字の形式や楕円平面の集中形式といった多様な類型が展開されている。どの案でも教会堂平面は矩形敷地を一杯に埋め尽くしており、おそらく土地を有効活用する必要に応えた提案と思われる。長方形の輪郭の中に複雑な構成の内部空間を押し込んでいる。多くの場合、教会堂は教団施設と一体とされるため、街区に埋没して一面ないし二面でしか外部空間に接していない。教会堂内部の構成は外に露わされない傾向にあった。サンタ・スザンナの計画においても、教会堂は教団施設と一体に整備されており、ファサードの一面だけが外部に接している。

反宗教改革運動においてイエズス会の果たした役割は小さくない。建築活動においても、1554年にはローマのジェズ教会堂をミケランジェロ Michelangelo Buonarroti (1475-1564) に依頼したのを始め、フェラーラやジェノヴァ、ナポリにも教会堂を建設するなど、旺盛な活動を各地で展開した。イエズス会の教会堂には定まった形式が認められないが、代表的なものとして、ローマのジェズ教会堂と共に、ティバルディによるミラノのサン・フェデーレ教会堂(図4)が知られている。ティバルディの登用は、教義の厳格さで知られたカルロ・ボッロメオの進言によるものであった⁶。一廊式の内部空間を総二階建ての教会堂で包む計画で、ファサードには円柱を多用しており、教会堂側面にも円柱が並んでいる。

サンタ・スザンナ教会堂は、古代帝政ローマ期の殉教者を祀る。聖人は教皇カイウス Caius (在位 282/3-95/6) の姪であったが、現在サンタ・スザンナ教会堂の建つ場所にあった邸宅⁷で殉教したとされる。その邸宅は信徒のための重要な集会施設として利用されていたものであった。その遺構がいつ頃まで存続していたのかは不明だが、15世紀シクトゥス四世 Sixtus IV (1471-84) の頃には修復の手が入り、16世紀後期にはドメニコ・フォンターナを始めとする建築家達が改修を引き継いだとされる⁸。1586年には教皇シクトゥス五世 Sixtus V (1585-90) によって、その妹カミッラ・ペレッティ Camilla Peretti

(1519-1605) の求めに応じてシトー会に与えられ、女子修道院として建て替えられた。1589年にはクイリナーレ丘の頂上一帯の教区教会となっている。1593年からの仕上げの工事記録にドメニコ・フォンターナと共にマデルノの名前が残されている。現存する教会堂は古い教会堂の外側を残したもののだが、反宗教改革運動の一環として改修が進められ、ファサードを含む大部分がマデルノの作品とされている⁹。

3. ジェズ教会堂のファサード

枢機卿アレッシンドロ・ファルネーゼ Alessandro Farnese (1520-89) の斡旋によりジェズ教会堂の計画に加わったジャコモ・バルッツィ・ダ・ヴィニョーラ Giacomo Barozzi da Vignola (1507-73) は、教会堂本体の建設を終えファサードに取り掛かったところで没している。ヴィニョーラのファサード案(図5)は二層の構成で、下層の翼部を構成する礼拝堂部分は、幅広の身廊の上層と曲線のバットレスで結ばれている。この下層両翼の張り出した部分には薄墨が施され、上下層の五間の柱間と頂部のペディメントにまとまりを与え、一体的なものとして見せている。平面においても、両翼部分は一段後退している。

ヴィニョーラ案は、上下層およびペディメントまで一貫して、中央柱間部分が前方へ迫り出すことが特徴である。上下の中央柱間では円柱を用い、また、下層の中央柱間内では壁面を大きく後退させて、中央部分を強調している。

ヴィニョーラの後をうけたジャコモ・デッラ・ポルタ Giacomo della Porta (1533-1602) の実施案(図6)では、柱が二本一対で扱われており、下層上部にはアエディキュラに枠取られたニッチがある。デッラ・ポルタ案では、バットレスが渦巻で装飾されているところがヴィニョーラ案と違っている。付柱の重なりから壁面の出入を検討すると、中央脇の柱間では、エンタブラチャーと壁が、柱の位置から段差をつけて後退しており、下層の両端柱間とその上部の渦巻の部分は、中央脇柱間よりさらに後の位置にある。

図1 マデルノ、サンタ・スザンナ教会堂、ローマ 1597-1603年
Arnaldo Di Luca - Roma

図2 サンタ・スザンナ
教会堂ファサード側面
Biblioteca Herziana

図3 イエズス会教会堂案
Giovanni de Rosis, 1575-80.
Modena, Biblioteca Estense, Raccolta Campori

図4 ティバルディ、サン・フェデーレ教会堂
Milano, Biblioteca Trivulziana

下層中央柱間にある弓形に三角が重なるペディメントのエアディキュラでは、内側の三角ペディメントを支える柱は外側のものよりひとつ前の位置にあるが、上層でも中央柱間にあるエアディキュラは前方へ迫り出している。下層弓形ペディメントの上に見える手摺を載せる基壇部分の段差が、そのことを示している。つまり、デッラ・ポルタ案は、上層あるいは下層の三角ペディメントのエアディキュラ、上下層中央三間の柱間、それに両翼部の三つの面が重ねられたファサードだということが、柱位置の分析によって知ることができる。ヴィニョーラ案と同じくデッラ・ポルタ案でも、中央ほど前面に迫り出す設計となっているのである。

4. サンタ・スザンナ教会堂のファサード

サンタ・スザンナ教会堂のファサードは、教会堂本体よりはるかに高く、平たい箱のような姿で建っている(図2)。下層の階高は、教会堂の両側に続く教団施設の部分と同じ高さに調整されており、また、上層の階高も下層にほぼ等しい。サンタ・スザンナでは、中央からその脇の柱間、さらにその外へと、柱間毎に壁が後退している。上下層の中央脇の柱間ではエアディキュラを設け、内側にニッチを穿ってそれぞれ彫像を置いている¹⁰。これらの彫像を置くエアディキュラには、天使の装飾が施されている。中央三間の柱間では、下層の円柱の立体感にあわせて、上層の付柱の突き出しが大きい。

サンタ・スザンナのファサード下層の三角ペディメントからうける印象は、ジェズ教会堂のどちらの案とも違う。ヴィニョーラ案の下層には三角ペディメントがなく、デッラ・ポルタ案では弓形の上に三角が重ねられているので、表現が緩和されているからである。サンタ・スザンナの下層ペディメントは、むしろティバルディによるトリノの聖殉教者教会堂 Ss. Martiri, Torino (図7) に似ている。聖殉教者教会堂のファサード下層では、ペディメントを鋭いコーニスで三角形に描いており、輪郭がサンタ・スザンナのものに相似している。しかし、ティバルディは主要なオーダーには円柱を用いておらず、上下層を同じ付柱の手法で扱っている。

サンタ・スザンナの下層では、円柱の用法が意匠上の要点となっている¹¹。柱身の曲面によって生じる陰影が中央三間の柱間にまと

図5 ジェズ教会堂 ヴィニョーラ案
Berlin, Kunstbibliothek Berlin mit Museum für
Architektur, Modelbild und Grafik-Design

図6 ジェズ教会堂、ローマ (デッラ・ポルタ案)
1573-7年 SCALA, Firenze

図7 ティバルディ、聖殉教者教会堂
トリノ 1577年 Museo Civico, Torino

図8 サンタ・スザンナのモチーフ
トリノ 1577年 Museo Civico, Torino
Anderson (筆者加筆)

まりを与えているが、壁体との間には隙間があるので、円柱は壁体に対し独立した存在である。この関係は上層の付柱のオーダーよりも明確であるし、下層では壁面とエンタブラチャーの段差が大きくなっており、範囲を明快に規定できる。柱とエンタブラチャーによる柱間三間の構成で、中央柱間が三角破風を載せて他の部分より一段前に出たものは、ひとつのモチーフとして認められる(図8)¹²。

しかし、聖殉教者教会堂では、サンタ・スザンナのモチーフを見出すことはできない。中央三間の柱間には重ねた付柱が用いられているが、各柱間は同一面上にあり、下層の柱間五間のまとまりの方が強くなっている。ティバルディは、教会堂を簡潔な形で捉えており、ファサードにおける壁面の出入が少ない。

5. 枠組としてのモチーフと枠内の壁体の関係

サンタ・スザンナでは、ファサード全体を構成するオーダーからモチーフの内側の壁体が乖離する傾向が見られる。円柱とエンタブラチャーのつくるオーダーの面が前方へ迫り出してくるのに釣られて、モチーフの内側でも少しずつ前へと壁位置が移っているのだが、その壁と円柱の間には切込みができています。モチーフの内側の壁とエンタブラチャーとの段差は明確で、壁面の分節というよりは差違を強調する表現である。このようにモチーフは、教会堂ファサード全体を特徴づける意匠でありながら、モチーフ内側の壁体に対しては異なる領域を切り取る枠組として機能している。

図9 サンタ・スザンナ教会堂ファサード モデル図
(筆者作図)

ファサードのモデル図(図9)¹³⁾を見ると、エンタブラチャーとモチーフ枠内の壁体との位置関係が一定しないことがわかる。A, B, Cの区間はモチーフの部分にあたり、Eの区間は全く表現が違っており教会堂のファサードから外れるので、Dの付柱の区間における壁とエンタブラチャーの位置を仮に基準として検討する。オーダーの面が一段迫り出したC区間における壁位置は、Dにおける位置よりも前方にあるが、エンタブラチャー前面からの距離は大きくなっている。C-D間で壁とオーダーの面の位置関係が変化し、壁が分節されていると考えられる。付柱と円柱の造形原理の違いが、壁の納まりに現れるのは理解できる。Aの区間においてもCと同様の位置関係を示している。しかし、B区間における壁体の処理は、何れのものとも違っており、他の区間での位置関係から類推することが難しい。B区間では、オーダーの構成原理による段差表現が円柱と壁体の位置関係に優先されているので、AあるいはC区間との整合性が取れていないのである。

つまり、モチーフ枠内においては、壁体の造形は独立しており、壁位置をオーダーとの関係から規定できない。ファサードの全体構成におけるモチーフ枠内の壁位置が不明瞭である。枠組であるモチーフについては、外側の柱間に柱を重ねて接続されており、ファサード全体を構成するオーダーの一部となっている。

このようなモチーフの枠組と枠内の壁体との関係は、モデルノの教会堂ファサードに繰り返し現れる。ヴァチカンのサン・ピエトロ教会堂 S. Pietro, Vaticano にはサンタ・スザンナと同様のモチーフが認められ、オーダーとは区別されて、アエディキュラを備える壁体がモチーフ枠内を充填する表現が示されている。モチーフ枠内の壁体は円柱のところで円く挟まれ、エンタシスのついた柱上部では隙間がはっきりと見える。壁面とエンタブラチャーとの段差も明確である¹⁴⁾。また、サンタンドレア・デッラ・ヴァッレ教会堂 S. Andrea della Valle, Roma 計画案にもサンタ・スザンナと似たモチーフがあり、モチーフ枠内の壁面はオーダーから独立している(図10)。

モデルノが1611年にフラミニオ・ポンツィオ Flaminio Ponzio (1560?-1613) とともに計画したボローニャのサン・ピエトロ教会堂 S. Pietro, Bologna のバジリカ計画案(図11,12)は、枢機卿シピオーネ・ボルゲーゼ Scipione Borghese (1576?-1633) に要請されたものであった¹⁵⁾。バジリカ本体についてヴァチカンのサン・ピエトロ教会堂との関係が注目されている¹⁶⁾が、ファサード部分に見られる試み

図10 サンタンドレア・デッラ・ヴァッレ教会堂 モデルノ案 ファサード平面図
Firenze, Uffizi, A 6743

も興味深い。ボローニャの教会堂案では、前面にロジgiaを設けることが提案されており、円柱とピアで支えられた開放的な空間の奥に、バジリカを閉じる壁が設置されている。立面図をみると、二本一対の付柱で示されたピアを主体に、ファサードが構成されている。身廊幅を一間とした上層は、三間に分節された下層部に渦巻装飾で繋げられている。下層では、それぞれの柱間一杯にパラディアン・モチーフが詰め込まれている。ファサードの面はバジリカの壁から離れているのだが、パラディアン・モチーフの枠内には、奥の壁にあるバジリカ入口のアエディキュラが描かれている。薄墨で奥行の違いを表現しているが、奥にある壁の意匠も手前のものと共に描画されているのである。二つの壁に施された意匠が図上で統合されている。こうした後年のボローニャでの試みから見ると、サンタ・スザンナの壁の扱いは、本来は二つの異なる面をひとつの平面上に重ね合わせた手法と考えられる。

サンタ・スザンナにおける円柱を用いたモチーフの枠組は、ファサードの壁を大きく穿つ開口を示唆する記号であり、枠内は一間奥の位置にあった本来は別の壁を投射する表現と考えられる。ファサード空間における位置の違いを表現するために、円柱と壁の間には切込みが設けられ、エンタブラチャーとは明確に段差が設けられている。下層の基壇が中央脇の柱間では大きく凹んで穴が開いていることも、上層の渦巻の下にみえる基壇部には突き出した装飾が見られるのに隣の中央脇柱間では逆に奥へ押し込まれていることも、本来は中央脇柱間に基壇がないことを示唆していると思われる。

上層中央のアエディキュラの開口にガラスが詰められず、奥の壁に浮彫装飾を見せているが、このようなモチーフの枠組と枠内の壁を引き離す機構が下層にも想定されている。この仕掛のために、ファサード部分は教会堂本体に見合わない平たい箱を立てたような姿となったと考えられる。モデルノは1602年から設計を始めたヴィラ・アルドブランディーニ Villa Aldobrandini, Frascati の背面ファサード(図13)で、サンタ・スザンナでの試みを進展させており、同様の実験を重ねていたようである。

6. 壁体の可塑性の発見

サンタ・スザンナファサードでは、目地の無い様な石の質感がファサード全体の基調となっている。天使像の装飾が頻出するものの、図像によるイメージ喚起は抑制されており、壁は基本的に装

図 11 マデルノおよびボンツィオ、
ボローニャのサン・ピエトロ教会堂平面図
Bologna, Archivio Arcivescovile, Fondo
Breventani

図 12 ボローニャのサン・ピエトロ教会堂 ファサード
Bologna, Archivio Arcivescovile, Fondo Breventani

図 13 マデルノ、ヴィラ・アルドブラン
ディニー、フラスカーティ 1603 年
Sächsische Landesbibliothek-Staats-
und Universitätsbibliothek, Dresden,
Dezernat Deutsche Fotothek

飾を必要としていない¹⁷。個々の要素が完結するオーダーの表現と一線を隔して、連続する壁体を面の違いで分節する可塑的な造形が展開されている。円柱に壁体が接続されずに隙間が生じている¹⁸ところに、古典的な建築構成における分節の概念を超えた造形の位相が示されているのである。こうした壁体の可塑的扱いは、ミケランジェロの例を除けば、ルネサンス期には見られなかった手法であり、後の盛期バロックに至る「うねる壁体」への第一歩と考えられる。

この壁体を可塑的に扱う手法が、通常言われているようなヴォリューム配分の必要というよりは、古典建築語法との対比によって導かれていることに着目したい。16 世紀後期においては、アンドレア・パラディオ Andrea Palladio (1508-80) が教会堂ファサードで、同一平面上における図像の重ね合わせを試みていた¹⁹が、マデルノの実験は円柱と壁体という異なる二つの表現をファサードにおいて統合する方向へ発展させている。マデルノは、論理的に構築される円柱オーダーの骨組みに対峙させて、可塑性に富んだ壁体の造型を引き出している。モチーフの記号的機能とは違って、形態を即物的に表現するのである。

マデルノの試みは、ピエトロ・ダ・コルトーナ Pietro da Cortona (1596-1669) に影響を与えたように思われる。ローマのサンタ・マリア・イン・ヴィア・ラータ教会堂 S. Maria in via Lata, Roma では、平たい箱を立てたようなファサード部分にパラディアン・モチーフの開口を設けて、ヴィラ・アルドブランディニーと同様の手法を示し、サンティ・ルカ・エ・マルティナ教会堂 SS. Luca e Martina, Roma のファサードでは、オーダーから独立した壁体が凹凸するサンタ・スザンナの試みを継承している²⁰。マデルノに薫陶を受けたフランチェスコ・ボッロミーニ Francesco Borromini (1599-1667) にあっては、特に可塑的な壁体の扱いに習熟し、サンティーヴォ・アッラ・サピエンツァ教会堂 S. Ivo alla Sapienza, Roma の内部に、曲面と平面の壁体を使い分けて幾何学的空間を形作るまでに至っている。

以上のように、マデルノの壁体の扱いは、反宗教改革運動からバ

ロックの時代へ通ずる建築的造型の変遷を読み解く鍵となっている。建築におけるオーダーの機能に検討を加える上でも、可塑的な壁体の建築的処理について、今後さらに研究が必要と思われる。

注

¹ イエズス会の建築活動については、次の文献を参照されたい。ed. Luciano Patetta, Isabella Balestreri, Cristiana Coscarella, Daniela Zocchi, *L'architettura della compagnia di Gesù in Italia XVI-XVIII sec.*, Brescia, 1990 / Gauvin Alexander Bailey, 'Le style jésuite n'existe pas': *jésuit corporate culture and the visual arts*, in ed. John W. O'Malley, Gauvin Alexander Bailey, T. Frank Kennedy, 'The Jesuits: Cultures, Sciences, and the Arts, 1540-1773,' Tronto, 1999, pp. 38-89

² ヴィニョーラ案の第二案 (1570) とデッラ・ポルタ案 (1571-) を指す。

³ 参照: Heinrich Wölfflin, *Renaissance und Barock: eine Untersuchung über Wesen und Entstehung des Barockstils in Italien*, München, 1888, pp. 89-90 / Anthony Blunt, *Baroque and Rococo: Architecture and Decoration*, New York, 1978, pp. 26-7

⁴ 都市における建築戦略については Thomas M. Lucas, *Landmarking: City, Church and Jesuit Urban Strategy*, Chicago, 1997 で具体的に分析されている。

⁵ 参照: Gauvin Alexander Bailey, 前掲書, p. 38

⁶ カルロ・ボッロメオは、建築規制を成文化して出版している (*Instructionum fabricae et suppellectilis ecclesiae libri duo*, Milano, 1577; ed. Paola Barocchi, *Trattati d'arte del Cinquecento fra manierismo e controriforma*, III, Bari, 1962, pp. 1-113 (note: pp. 403-6) に集録)。ボッロメオの規制は建築に特定の類型を押し付けるのではなく、実用性を問う方向性を示している。ファサード以外の外部意匠においては簡素なものを推奨している。参照: Aurora Scotti, *Architettura e riforma cattolica nella Milano di Carlo Borromeo*, *L'Arte*, 1972, pp. 54-90。ボッロメオがパラディオに与えた影響については、Hajnóczy Gábor, *Palladio e San Carlo Borromeo*, in *Bollettino del centro internazionale di studi di architettura Andrea Palladio*, XXII (1980), parte II, pp. 205-211 参照。また、ボッロメオは 1560 年代にフィリッポ・ネーリ Filippo Neri (1515-95) と共にローマの初期キリスト教建築の探訪を行っており、16 世紀後期の初期キリスト教期ゆかりの教会堂改修に影響を与えた可能性が強い。

⁷ 教皇の名に因んで titulus Gai と呼ばれた。

⁸ 詳しい経緯については Howard Hibbard, *Carlo Maderno and Roman*

Architecture 1580-1630, London, 1971, pp. 110-114/ Anthony Blunt, *Guide to Baroque Roma*, London, 1982, pp. 148-50 を参照されたい。

- ⁹ この教会堂の聖歌隊席下には聖人の遺物を祀るコンフェッショ (confessio: 殉教者の遺体や聖遺物を安置する祭壇の地下に設けられた小さな墓室) があるが、ここには施設の改修を進めた枢機卿ジローモ・ルスティクッチ Girolamo Rusticucci の墓も収められている。このコンフェッショは、反宗教改革運動における初期キリスト教殉教者に対する崇敬を示す早い例として知られている。
- ¹⁰ S. Susanna, Felicità, Caius および Gabinus (Susanna の父) の彫像。
- ¹¹ 円柱の使用については Hibbard が指摘しており、ミラノを中心とした北イタリアのファサードの影響だとする見解を示している。Hibbard, 前掲書 p. 41
- ¹² このモチーフに関する問題については次の文献を参照されたい。小林衛「サンタ スザンナ教会のファサードにおける円柱の問題」日本建築学会九州支部研究報告 第 39 号・3 (2000 年 3 月), pp. 537-40 / 福田晴彦, 小林衛「ヴェネツィアのパラッツォ・ドゥッカルーネ内トリブナーレのモチーフ」日本建築学会九州支部研究報告 第 39 号・3 (2000 年 3 月), pp. 533-6
- ¹³ 参照: Paolo Portoghesi, *Roma barocca: storia di una civiltà architettonica*, Roma, 1966, Appendix I, p. 527
- ¹⁴ マデルノはヴァチカンのサン・ピエトロでもローマのサンタ・スザンナやサンタンドレアでも、壁面とエンタブラチャーの段差に対し、持送りをを用いるといった緩い表現をしていない。
- ¹⁵ 内陣は 1576-7 年にドメニコ・ティバルディ Domenico Tibaldi (1541-83) によって再建されていた。パラディオのモチーフ「四柱の間」を使って、高いクロス・ヴォールトにしている。参照: Aloisio Antinori, *Scipione Borghese e l'architettura: programmi progetti cantieri alle soglie dell'età barocca*, arte e storia, Collana diretta da Liliana Barroero 3, Roma, 1995, pp. 279-308
- ¹⁶ Hibbard, 前掲書. p. 191
- ¹⁷ ボッロメオの意向に沿う方策である。注 9 参照。
- ¹⁸ 壁を挟って円柱を設置する方法は、ジャコモ・ヴィニョーラによる S. Anna dei Palafrenieri, Vaticano の設計に先例がある。実施は息子のジャチント Giacinto Barozzi da Vignola があたったとされている。この教会堂の壁にはコーニス

廻らされ、分節された面毎に縁取りがされており、オーダーから乖離した壁の表現には至っていない (ただし、内装については 17 世紀に改装の記録がある。参照: Blunt, 前掲書, pp.14-5 / Wolfgang Loz, revised by Deborah Howard, *Architecture in Italy 1500-1600*, Pelican history of art, Yale Press, New Haven/ London, 1995 (1st ed. Penguin Books, Harmondsworth, 1974), pp.19-20)。また、デッラ・ポルタのジェズ教会堂案の下層中央でも、壁を挟って円柱を置いているが、壁の面はオーダーの位置に沿っている。

¹⁹ ボローニャのサン・ピエトロ教会堂バジリカ案(図 11)にはパラディオの Il Redentore, Venezia の影響が見られる。

²⁰ この他、コルトーナは S. Maria della Pace, Roma のファサード上層において、柱やパネルの間に、同じ高さでモールディングの断片を配置し、オーダーや装飾の背後にある壁体の存在を表現している。

図版出典

- 1) ed. Henry A. Millon, *The triumph of the Baroque Architecture in Europe 1600-1750*, New York, 1999
- 2, 8, 10) Howard Hibbard, *Carlo Maderno and Roman Architecture 1580-1630*, London, 1971 ただし、8 については筆者が加筆。
- 3, 4) ed. Luciano Patetta, Isabella Balestreri, Cristiana Coscarella, Daniela Zocchi, *L'architettura della compagnia di Gesù in Italia XVI-XVIII sec.*, Brescia, 1990
- 5) ed. Jane Turner, *The Dictionary of Art*, 26, New York, 1996
- 6) E.H. Gombrich, *The Story of Art* (16th ed.), London, 1995
- 7) Daniela del Pesco, *L'architettura del seicento*, Storia dell'arte in Italia, Torino, 1998
- 9) 筆者作成
- 11, 12) Aloisio Antinori, *Scipione Borghese e l'architettura: programmi progetti cantieri alle soglie dell'età barocca*, arte e storia, Collana diretta da Liliana Barroero 3, Roma, 1995
- 13) Rudolf Wittkower, revised by Joseph Connors, Jennifer Montagu, *Art and Architecture in Italy 1600-1750* (6th ed.), Pelican history of art, Yale Univ. Press, New Haven/ London, 1999

(2001年 2 月10日原稿受理, 2001年 7 月24日採用決定)